

お春

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

一〇 アラデン君

商賣には、とかく有り勝ちの景氣不景氣といふものを、たツた一時間經驗して見て、お春とおしまの晴れやかだツた氣持もすこしは曇らされてしまつた。二人は、賣らうと思ふ家の入口へは、連れ立つて行かぬ事に定めてゐた……一所だとしても、眞面目に口上を述べられまいと思つて。それで、門のところまで一人が馬の手綱をもつてゐると、も一人が石鹼の見本をもつて、その家の、買ひさうな人に面會するのだつた。おしまは、三個を賣り、お春は小函を三つ賣つた。人を説きつけるのは、どつちが上手でどつちが下手かは、始からよく定まつてゐたのが、二人は、賣れるのも賣れないのも、時の運だとはかり考へてゐた。御客の方は、おしまを見ると、石鹼はいらないといふし、効能をきかされても、やつぱりいらないといつた。お春には、幸運の星が附添つて居ると見えて、この子の面會した人は、石鹼が丁度無くなつてゐたのを思ひ出したり、さもなくても、將來に入用だからといつたりした。こんな譯で、おしまが一生懸命になつてしても甘くゆかぬ事を、お春は殆ど何の骨折もしないで仕逢けるのであつた。

「お春さん。こんど、あなたの番よ。ほんとに有りがたい」とおしまは、一軒の家の門の前に馬を停めて、奥まつた住宅を指しながら、「私、まだ先刻の慄えが止まらないの。(實は、ある所で、婦人が二階の窓から首を出して『お歸りく。函の中に何を持つて居たつて不要だから』と怒鳴つたのだツた) この家にどんな人が居るか知らないけれど、窓の戸が

残らず閉まつてゐるわ。もし留守だつたら、ここの家は勘定にいれないで、この次の家も、あなたがするのよ。」

お春は、門からの細道を傳はつて、横手の入口のとこへ行つた。その縁の搖り椅子に、一人の男が座つて、玉黍蜀の皮を剥いてゐた。風采のよい男だつたが、若いといつて可いのか、それとも中年といふのだから、お春には分らなかつた。とにかく、その男は、都會のものらしく、顔をきれいに剃つた手入の届いた口髭のある、そして身にしつくり合ふ服を着けた人だつた。お春は思ひがけぬ人物に出遇つて、すこし面喰つたが、自分の用向を述べるより他に、どうしやうもなかつたので、

「こちらの奥さんは御在宅でせうか。」と尋ねた。

「僕が、今のところ、ここの奥さんですが、何の用です。」と、その男は、すこし可笑しさうに言つた。

「あのう……えいと……もしも……右殿は御人用でありませんか。」とお春が訊くと、

「僕、石鹼がいりさうに見えますか。汚いんですか。」と、男は案外な返答をした。

お春は、笑窪を作つて笑つて、

「そうぢやないんです。私石鹼を賣つてゐるのです。今第一等だつていふ評判の石鹼を御知らせしやうといふんです。その名は……。」

「あ、そうですか。僕、それを知つてゐますよ。純粹の植物性の脂で作つたツていふんです。」

「ごく純粹なんです。」と、お春は保証した。

「酸の氣はなくてね。」

「え、すこしも。」

「それで、子供でも、樂に洗濯が出来るんですね。」

「赤子でも。」とお春が矯正した。

「ははあ、赤子？　此頃は、子供でなくて赤子といふんですか。段々、あとへ年をとるんだな。」

話さない先に、その石蔵の効能を心得てゐる御客にぶつかるとは、運の良い事だ、と、お春は思った。それで、ますますくにごくして、その人に勧められるまゝに、傍の腰掛に、縁の端近く座を占めた。そして紅蕃薇の入つてゐる飾り函の奇麗な事を見せ、紅の方の値段と、白雪の値段とを話したりしてゐるうちに、門のところに待たしてあるおしまの事を忘れてしまつて昔馴染の人見たやうに、この男と話しこんだ。

「僕は、今日は此家の主人だけれど、こゝの間ぢやないんだよ。」とこの愉快な人はいつて聞かせた。

「僕は、叔母の家へ遊びに来てるのさ。その叔母が今日出掛けて留守なんだ。僕は、子供の時分こゝに居たんで此處が大好き。」

「子供の時に居た田舎に勝すいゝ處はありませんね。男はチラとお春を見て玉黍蜀を下へ置き、

「君は、子供の時分を、昔の事みたやうに思ふのかね。」

「私、よくその時分の事を記憶てるますよ、……すいぶん、古い事のやうに思はれるけれど。」と、お春は眞面目に答へた。

「僕も、自分の子供の時の事をよく記憶てる……特別にいやなのだつたから。」

「私のもよ。あなた、その時分に一番困つた事は何？」

「主に、食物たべものと着物が無かつたこと。」

「まあ」と、お春は、氣の毒さうに言つて「私は、靴がなかつたのと、赤ん坊が多すぎたのと、それから書物が思ふやうになかつたのが厭でしたよ。でも、貴方、今はもう任せになつてらつしやるのでせう。え。」と、お春は、心配らしく尋

ねた。何故といふに、この人は、風采が立派で、金持さうに見えてゐながら、眼に疲勞の色があり、黙つてゐる時の口元の悲しげなのが、子供にも解る程だつたから。

「あゝ、今は可なりにやつてゐるんだよ。」と微笑みながら、その人は答へて「一體、幾つ、その石鹼を買つたらいいのかね。」

「あなたの叔母さんとこにいくつあるの。いくつ入用でせうね。」と、商賣氣のないこの賣子がさういふと、

「僕も知らないがね、石鹼は保存だらう。」

「どうですかね。」とお春は正直に答へて「廣告をみませう。きつと書いてある。」と、言ひながら衣袋から廣告を取り出した。

「この商賣をして、大した儲が出来たらどうするんだね。」

「私達ね、自分の爲に賣つてゐるのぢやないんです。」とお春は打明けた。「門のところで馬の手綱をもつてゐる小女は、御金持の鍛冶屋の娘で、御金なんか困らないのよ。私は貧乏だけれど、伯母さんとこに居るの。だから、伯母さん達は、私に、行商なんかさせないわ、あの御友達に賞品を取らせるように手傳つてゐるんです。」

お春は、これまでの顧客に對つて、内情を話さうなどと思ひもしなかつたが、今、思はずこの人に、下山の夫婦や子供達の事、その貧窮と佻しい生活、是非とも置ランプがなくてはならぬ譯を話してしまつた。

その人は、立ち上つて門のところに居る「鍛冶屋の娘」をのぞきながら笑つて、

「そんなにその事を言譯しないでいいさ。その家のものが欲しいと思ふなら、ランプを手に入れたつて差支ない。まして、君がその連中にランプをやりたいと思ふなら、なほのことだ。僕も、置ランプが無いのは辛いもんだといふ事を経験してゐるよ。その廣告を一寸見せて御らん。計算してみよう。下山の家では、もういくら賣るといふんだへ。」

「今月と来月とかゝつて、もう二百個賣れば、クリスマス迄には、ランプが貰へるんです。そして、夏までには傘が手に入るでせうよ。でも、私は今日限りで、あとは、手傳ふわけに行かないの。うちの伯母さんが、やかましいから。」

「なるほど。そんならそれで差支ないよ。僕が三百個買はう。すると、傘も何も揃つて貰へるんだらう？」

お春は、縁の端近く腰掛に坐つてゐたのに、今の語をきいて、急に身體を動かした拍子に、後ろへひつくりかへつて「はしどる」の叢しげみの中へ落ち込んでしまつた。幸ひ、低い縁だつたので、買主が、可笑しがりながら早速引き上げて、立たせて置いて、塵を拂つてくれた。

「大きな注文を受けた時に、びつくりした顔をしちやいけな。如何でせう、三百五十個に願ひますまいかといふんだね……立人らしくもなく、沈没してしまつたりしないで。」

お春は、今のしくぢりに顔を眞赤にして、
「私にや、とても、そんな事は言へないわ。でも、貴方そんなに澤山お買ひになつていゝんでせうか。ほんとにお差支な
いの。」

「もしお差支なら、他の方で儉約をするさ。」とふざけたやうに、この慈善家先生は答へた。

「もし、貴方の叔母さんが、この石鹼がお嫌ひだつたら、如何しませう。」とお春は、案じ顔に尋ねた。

「いや、僕の叔母さんは、僕の好くものを、いつでも好くんだ。」

「私の伯母さんは、そうでないのよ。」

「ちや、君の伯母さんが、どうかしてゐるんだ。」

「さもなけりや、私がどうかしてるのね。」とお春は笑つた。

「君は何といふ名なの。」

「近藤春子」

「春子ツていふのか。僕の名を知りたいかね。」

お春は、眼を輝かせて、

「私知つてゐるわ。貴方は、お伽話のアラデンさんにちがひない。私一寸かけ出していつて、おしまさんに教へて上げてもいいでせう？ きつと待ちくたびれてゐるから。聞かしてよろこばせてやりませう。」

その男が、うなづいて見せたので、お春は、細道をひた走りに走つて、馬車の間近に來た時には、我慢しきれなくなつて、

「一寸、おしまさんく、みんな賣れてしまつてよ。」

アラデン君も、にこくして後から隨まいて來て、この僞まのやうなお春の言葉は事實だと證明してくれ、馬車の後部から石鹼の箱を下ろし、廣告まで引取つて、その晩、すぐ賞品の事を會社へ掛合つてやると約束した。

「もし、君方二人ね、どうにかして祕密が守れるものならね、黙つてゐて、感謝祭の日に、下山の家へランプが届くやうにしたら面白からうね。」と言ひながら、二人の足の上に古膝掛をたくし込んでくれた。

二人は、悦んで同意し、口を揃へて、有りがたうくを騒々しく言ひ立てた。お春は、眼に嬉し涙をさへ浮べてゐた。

「どういたしましたと。」と、アラデン君は、笑ひながら、帽子を脱つて挨拶をし「僕も、以前販賣掛りのやうな事をしてゐたんで……何年も前だが……手際よく商賣が行くのが僕は好きだからね。さやうなら、春子さん。何でも賣るものがあつたら、一寸、僕に知らせて下さい。僕は、前以てその品が入用なのに定まつてゐるから。」

「さやうなら、アラデンさん。きつとお知らせします。」と、お春は、黒い髪を揺り動かし、手を振りく答へた。おしまは、物に怖ぢたやうに小聲で。

「一寸、お春さん。あの方、帽子を脱つたわ……私達まだ十三にもならないのに。私達が大人になるにはもう五年かゝつてよ。」

「いゝわ。今だつて、もう大人の玉子ですもの。」

おしまは、思ひ出しては悦びに堪へられなくて、

「そして、膝掛をたくし込んでくれたのね。なんて素晴らしい人でせう。品物をみんな買ひ取つてくれるなんて親切ね。たつた一日で、ランプも傘も買へるやうになるなんて！ あなた、桃色の着物を着て来てよかつたでせう……うちの母さんが、下へフランテルを着せたにもせよさ。あなたは、紅や桃色を着るとよく似合ふの。そして茶色なんかだとまるで駄目。」

「うそなのよ。」と、お春は溜息をして「あなたみたやうだといゝけれど……何色でもよく似合ふから。」と言つて、おしまのまるっこい赤い頬や深みのないその碧い眼や、氣の利いた語の出た例のないその紅い唇を、羨ましさに眺めた。

「いゝぢやないの。」と、おしまは慰め顔に、「あなたは、大變賢い子だつて皆他人がいふわ。そして、うちの母さんが、あなたは、年が行くにつれて、段々容色が好くなるだらうつて。うそのやうだけれどね、……私も、それや見ツともない赤ン坊で、つひ一二年前まで不綺麗だつたの……赤ツ髪が黒くなら迄はね。今の方は何ていふ名なの。」

「私、聞いて見やうとも思ひ付かなかつたわ。」と、お春は叫んだ。「おみね伯母さんは、お前らしい事だときつと仰るでせう。ほんとに私のしさうな事ね。そら、アラデンとランプの伽話をあなた知つてるでせう？」

「まあ、お春さん。始めて遇つてすぐ、其人に渾名を付けるなんて、あんまりぢやないの。」

「アラデンといふのは渾名といふんでもないわ。何しろ、あの方ね。笑つて悦んでゐたらしかつたの。」

人間以上の努力で、二人は、その唇に封印をして、右の祕密を守り了せた。もつとも誰が見ても、二人はどうかしてゐ

るとしか思へなかつたけれど。

感謝祭の日に、置ランプが大きな幽に入つて到着した。下山シーソーは、荷を解いて、それを据え、にはかに妹達の商賣上手なのに感心しだした。お春はランプの來た事を聞いたが、すぐは見に行かなかつた。それといふのが、夜になつてその勝利品に燈火が點いて、紅のちりめん紙の傘越しに、赤い火が輝くのを見やうとの根柢なのだツた。

(續く)